Nagoya University Center for Developmental Clinical Psychology and Psychiatry
http://cdcpp.nagoya-u.ac.jp/

名古屋大学発達心理精神科学
教育研究センターニュース

No. 4 2012年度

KOKORO

編集／発行
名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL:052-789-2658

座談会

学生相談からみた大学生の心の健康～その時代的変遷～

松本　今日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。本日は『学生相談からみた大学生の心の健康～その時代的変遷～』というテーマで、先生方のお話をお聴きしたいと思います。最初に、本学学生相談総合センターの鈴木健一先生から今日の企画について簡単にご紹介いただきます。

鈴木　時代や文化の変遷と共に、学生の気質も変わってきているように感じます。そこで学生の心の健康について、長年にわたり本学の学生相談をリードされ、昨年度、ご退職された鶴田和美教授の『学生生活サイクルにみられる学生の心理的特徴』（表1）を指針としながら考えてみたいと思います。今日は特別に、学生相談の第一人者でいらっしゃる東京工業大学保健管理センターの齋藤憲司先生をお招きしました。それから、発達心理精神科学教育研究センターの前センター長であり、かつて本学の学生相談に携わられていた森田美弥子先生にも、お話をお聞きしたいと思います。

松本　本日、司会を務めさせていただきます発達心理精神科学教育研究センター長の松本です。よろしくお願いいたします。

入学期　～まじめな新入生～

松本　まず、入学期の学生の心の健康について、齋藤先生にお伺いしたいと思います。

齋藤　東工大の齋藤です。この2、3年に顕著にみられる特徴として、人数はわずかではありますが、合格直後に、親御さんと一緒に来談して、カウンセリングの先行予約をするということが新しい流れだなと思います。大学に入ったらカウンセリングを受けながら、4年間過ごすんだということです。彼らの多くは、発達障害や精神医学的な診断を受けていたり、中学・高校からの長期不登校を経験していたりします。「新入生オリエンテーションはどのように過ごしたらいいか？」など、入学直後の適応からサポートします。場合によっては、学生支援課や教務課の方にお願いして、「ちょっとこの子、（人前で緊張するので）少し時間差で入場させてあげて」とお願いすることもあります。

鈴木　名古屋大学では、先行予約はありませんが、学生本人のカウンセリングを、保護者が申し込むことが少しずつ増えてきましたね。

齋藤　共通する傾向が生じてきているのかもしれませんね。

松本　そのあたりは森田先生が学生相談に携わっていらした時はいかがでしたか？

森田　私は学生相談室の専任で昭和63年から平成6年までいましたが、入学前からの相談はありませんでした。学部に異動してから、親御さんからの問い合わせや説明会参加があると聞くことも多く、今のお話に「やっぱり」って思いました。最近の学生さんは、新入生ガイダンスなどで、一斉に「おはようございます」と、とても明るく、お行儀よく挨拶します。「良い子」ではあるけれど、悩むとか深く考えるというのが薄くなっているかもしれません。

齋藤　授業には、きっちり出るんですよね。ただ、この10年の間に1年生の私語が多くなりました。それから、ここ数年顕著にみられるのが、「学生」ではなく「僕たち生徒は」と言ったり、大学と言わず「学校」と呼んだりすることです。

森田　ひとつ聞いてみたいのですが、最近の名大では不本意入学の相談はあるのですか？

鈴木　思いのほか、少ないですね。

森田　数字は不確かですが、私が学生相談に携わっていた頃は、毎年4月は不本意入学の相談がいっぱいでした。今は、そういう悩みは潜在的にはあるかもしれないけど、もっとそつなく志望学科などを決めているのかなと……。

鈴木　そして入学直後から、勉強にまた勉強ですよね。GPAのために1年のうちから勉強する……。

松本　そういう意味では比較的明確な目標を持って、大学に入っている学生さんもいるわけですね。そのあたりは東工大ではいかがでしょうか？

齋藤　不本意入学については、減っている気がします。かつては、やむなく第2希望でという学生さんが一定数いましたが、今はそれを言う1年生は、本当に少なくなりました。東工大でいいと思えたり、序列をそんなもんだって思えたりしているのでしょう。いざとなったら、大学院から移れるし。その反面、GPA を気にするということがありますね。同じ科目で違う先生が担当していると、採点の基準や課題の厳しさが違う、大学として何とかしてくださいという声はよく出てきます。

中間期（2、3年生）
～忙しく堅実な学生生活～

松本　次に2、3年生ですが、一般的にいろいろな意味で余裕ができてくる時期ですね。

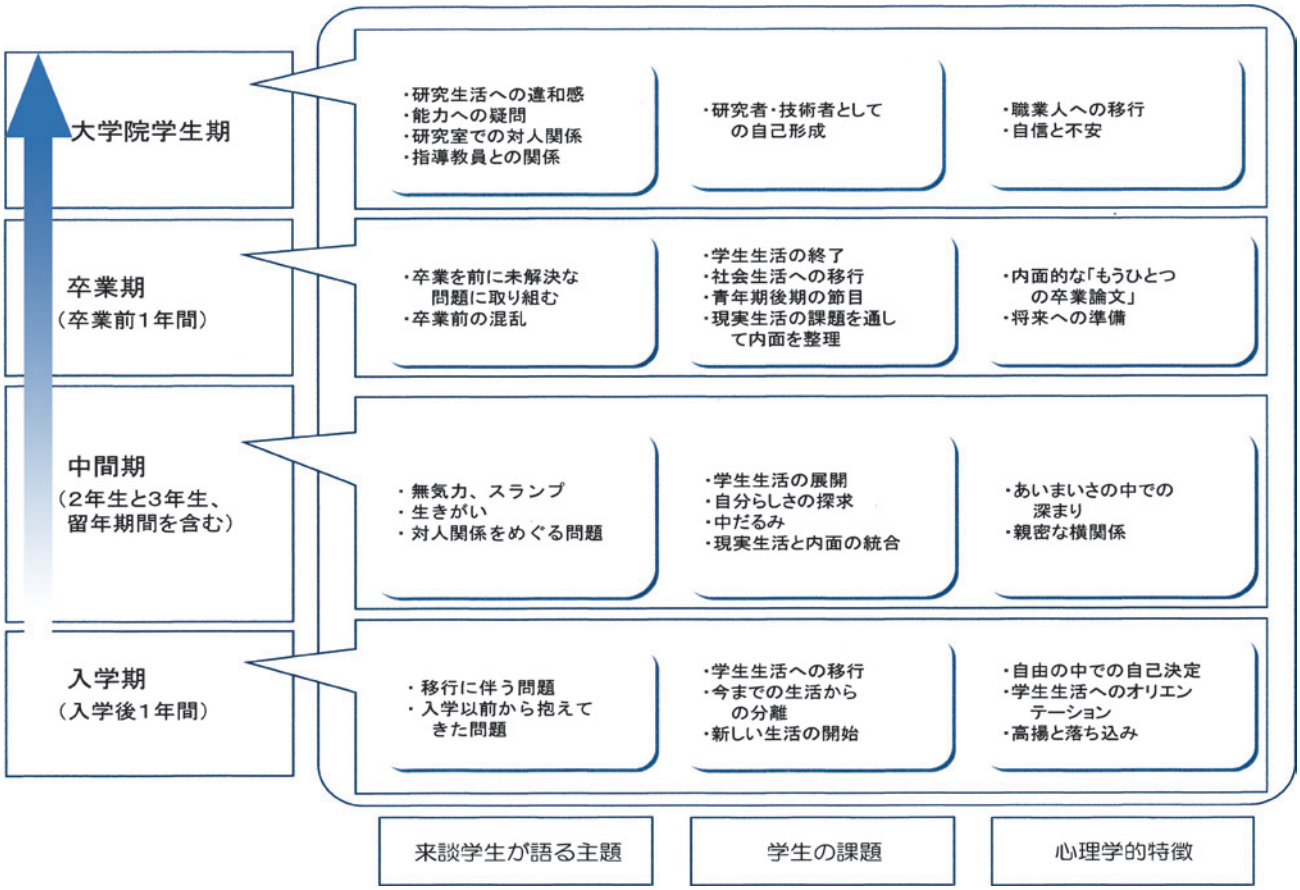
齋藤　東工大の場合、9割近くが大学院進学ですので、就職活動という言葉が学生の頭にあまり浮かばない。2年生から専門科目が始まっていくのですが、もともと東工大はくさび型カリキュラムと称していて、教養的内容は1年生たくさん、2年生それなり、3年生もやる、4年生もちょっとやる、そして随時専門の割合を増やしていくんですね。とにかく学生たちが言うのは、教養や語学、体育はいいから、早く専門をやらせてくれと。模索云々ではなく、先へ先へですね。ほとんどの学生が、4年からじゃなく、もっと早くから研究室に入れてほしいと言います。

松本　そうすると、モラトリアムという言葉で言われた、人生を考える猶予期間という大学生活はあまりイメージできないのですが……。

齋藤　モラトリアムはどの学年でもちょっと経験する程度で、大きく何かをトライしてみるとはならないですね。鶴田先生の「中間期こそ、うまみのある時代」では、今やなくなっていますね。

鈴木　先へ先へに乗り遅れてしまって、学力的につまずいて留年している学生さんと学生相談で出会うことが多いですよね。

表１　学生生活サイクルにみられる学生の心理的特徴



出典：鶴田和美編　『学生のための心理相談』（培風館、2001年）

齋藤 憲司
東京工業大学
保健管理センター教授

専門：臨床心理学、教育心理学
研究テーマ：
教育コミュニティにおける
心理援助、思春期・青年期の
対人関係、等

森田 美弥子
名古屋大学
大学院教育発達科学研究科教授

専門：臨床心理学
研究テーマ：
名大式ロールシャッハ技法、
心理臨床家の養成教育、等

松本 真理子
名古屋大学　発達心理精神科学
教育研究センター長・教授

専門：臨床心理学
研究テーマ：
子どものメンタルヘルス支援
子どもの心理アセスメント
学校臨床心理学

鈴木 健一
名古屋大学　発達心理精神科学
教育研究センター
学生相談総合センター　准教授

専門：臨床心理学、精神分析
研究テーマ：
学生相談における対人関係
精神分析

森田　最近の学生さんはみんな忙しそうという感じがします。それから、2、3年生になると留年が見えてきたりするので、来談者の増加傾向は実感していました。

齋藤　東工大の2、3年生の来談率は低めです。2年生から学科に分かれるので、専門もやれるし、先生方の目も1年の時より届くということもあって、わりと順調に進む子が多いですね。ただ、1年生の時に友達が作れなかった学生は、2、3年生も一人で過ごす。4年生になって研究室に入ってやっと人間関係を味わうけれど、その子たちへのケアというのはいつの時代もありますね。

松本　先ほど1年生は「僕たち生徒」という意識だと。2、3年生になっていかがでしょうか？

齋藤　言ってますね。4年生になって研究室に入るまでは言っている気がします。

卒業期　～主体的活動へのつまずき～

鈴木　3年までは順調だったけれど、卒業論文で初めて、自分で考えるという作業に直面して、結果、ひきこもってしまうことがあります。卒業期になっても未だ受け身から能動へシフトされずといった感じでしょうか。それまでのカリキュラムがきちっとしていて、能動へシフトしにくくなっている。

齋藤　名大でもカリキュラムの自由度が小さくなっている可能性があるわけですね。

森田　なっていると思います。私が学生相談室にいる頃から少しずつ変化が起こっていました。

齋藤　東工大もカリキュラムが本当に密で、どの類のどの学科へ行くかで、どの授業を選ぶかがほぼ固まってしまうんです。そういう意味では高校から大学への接続が、スムーズになっているとは言えますね。その結果、研究室所属、あるいは大学院で初めて、大きなギャップを感じることになる。鶴田先生のおっしゃっていた「知識の消費者から生産者になる」のも同時に来るので、研究室所属が非常に大きな転換点になっていると思います。学部時代は表彰されるくらい成績が優秀だったけれど、研究室に入ったら何も手につかなくて、一気にダメな学生という位置づけになってしまい、自信をなくして大きな混乱やら不登校になるという学生が少なからず出ます。

松本　そういう学生さんが来談するということはあるのですか？

齋藤　本人が来る場合もあるし、あるいは、ひきこもってしまったということで指導教員の先生がひっぱってくることはとても多いです。自信をとり戻してもらうにしても、これまでの、優等生だったけれども受け身である枠の中にいた自分から、どうやって新しい在り方に馴染んでいくか。それは人としての在り方を結構大きく変えなくてはいけないことで、意外と時間のかかる、難しい課題だったりします。

松本　学生相談室でそういう学生さんが継続して来談するための、先生の御苦労とか工夫はいかがでしょうか？

齋藤　大雑把にいってしまえば、にこにこして座っている、相手を脅かさないことに尽きます。常に評価にさらされて、優秀な自分で来ているので、そういう目で見ない。大変だったね、でも楽にいこう、本当は何が好きなの、もし話したいことがなければ一緒にここでぼっーとしていてもいいよ、という感じで、生活リズムをつくるためにも1週間に1回来なよ、とつなげていくうちに徐々にという感じです。

松本　そういう学生さんにとって、何も評価されないで、いつもにこにこして座っていてくれる先生がいる場所は、初めての体験かもしれませんね。学生はそういう環境を提供すると変わっていくという印象はありますか？

齋藤　それはありますね。学生が変わっていくと先生たちも安心するし、自分たちの教育の在り方を少し考えてくださることもあります。そして、教職員の方と我々カウンセラーとの間で役割分担ができ、共に学びあえるようになるということがありますね。

松本　ひきこもりは、名大ではいかがでしょうか？

鈴木　多いですね。先生方がとても熱心にアプローチしてくださり、学生と一緒、あるいは、親御さんと一緒に、来てくださったりします。

森田　保護者はその後、連絡をとってきますか？

齋藤　ええ。大体の親御さんとは、時々の面接や連絡ですが、中には長期継続される親御さんもいます。

森田　以前は、親御さんが心配になって最初だけついてくるということはあっても、何回もはなかったので、びっくりです。ひきこもりの学生さんとは、面接を続けるのがなかなか難しかったですね。

松本　ひきこもり傾向の学生をつなぐ工夫はありますか？

鈴木　趣味の話をしたり、カウンセラーも自分の好きな話をしたり。学生相談総合センターでは、『コレクション自慢の会』や就職支援の『Step by Step』など、ひきこもっている学生さんにとって適応への中間地点となるような活動を展開しています。

齋藤　10年ちょっと前までは、不登校の中でもスチューデント・アパシーっぽい、学校に来れないことに対して罪悪感がなく、先生や親御さんにつれて来られても、全然気にしていないという学生さんは多かったですね。今は、自分が不登校であることに、目に見えてびくびくしている。無理やり今の学生たちが幼くなっているという方向に論調をもっていってもなんですが、中学や高校の不登校の生徒さんと近い感じがする時があります。

森田　本当は来たいんだけど。

松本　葛藤をもっているということですね。

齋藤　ええ。それをあまり言葉にできないので、（身体症状として）身体に出たりもするのですが。

大学院学生期　～人間関係の悩み～

松本　いよいよ次は大学院学生期ですが、齋藤先生の大学では、全入に近いくらい進学されるのですね。

齋藤　東工大の大学院を中心に他大学への進学も含めれば9割くらいになりますね。院へ行くのが当たり前と思っているようですが、本当の意味で改めて選びとってほしいんです。なぜ大学院に行くのか、なぜこの研究室でこの領域なのかと。でも、そうならないことが……。

松本　主体性を発揮しないまま進学するということでしょうか。

齋藤　ええ。世間的な評価や風評から研究室を決めちゃっているみたいで。

松本　そうやって入ってきた大学院生の来談動向というのはいかがでしょうか？

齋藤　うちは、学部生よりも大学院生の来談率の方がずっと高く、どんどん高くなってきています。

松本　来談理由に特徴はあるのですか？

齋藤　一つには、大学院に入ってから、本当にやりたかったことはなんだろう、そもそもこの領域でやっていけるのかと、問い始めるというのがある。それから、人間関係ですね。初めて小集団での密な人間関係を経験して、そこでちょっとした行き違いがあって、先生はあの学生をひいきにしているとか、他の学生との微妙なライバル心が目覚めたりすることで、こぼれていくことがあります。その他、教員との関係性が壊れて、ハラスメント的だと相談に来る学生もいます。

鈴木　うちの大学院生来談率も高いですね。人間関係の問題であったり、就職が決まらなかったり。

松本　森田先生が学生相談をされていた頃の大学院生の来談は、いかがでしたか？

森田　研究室という集団との関係不適応が、印象に残っています。鶴田先生は、大学入学期が、受け身から自発性へのシフトが起こる時期と指摘していました。それが、時代と共に大学と高校の差が小さくなり、大学もカリキュラムがきっちり決まっていて、自発的にせずに済んでしまう。大学院に入る時に初めて受け身から能動へのシフトを体験して、いい意味での山場になったり、逆に、つまずいたりしているのではないかと思います。

齋藤　大学院の修士課程で本格的に研究をやりたいけれど、実際には就職活動に浸食されている。それが大きいですよね。大学院重点化で、他大学を卒業した学生を受け入れているのですが、そうすると、東工大に馴染む

前に就活になってしまう。学歴ロンダリングなんて言われたりしますが、就活で去っていく学生を生産してどうなんだという議論もあります。学生たちも親和感をもたないまま卒業するし、先生の方も面倒をみる気が弱くなったり、可愛く感じられなかったりで、ミスマッチの起きやすい状況かもしれないですね。

鈴木　同僚の山内先生と一緒に、先生方に学生気質や教育上の工夫をインタビューした際、齋藤先生がおっしゃっていたように、本来ならば就職か研究かを選びとってほしいけれど、1年後期には就職活動が始まって、研究の楽しさを味わう前に就職が決まり、それから研究がスタートするんだよねと、みなさん言われていましたね。

森田　臨床心理学のコースもちょっと似たところがありますね。研究の面白さを知る前に、実践をやって、実践の面白さを知ってしまう。

松本　主体性を発揮してほしいけれど、もう決まっているから、そこにのっかっていけばなんとかなる。

森田　奥の方には研究への関心があって、遠慮してるのかもしれませんけどね。

学生へのメッセージ

松本　先生方のお話を聴いて、学生さんは忙しい生活を送っていて、モラトリアムという言葉はどこにいったのかなという印象を受けました。一方で大学生や院生時代の課題は相変わらずあるようです。最後に、今の学生さんに向けたメッセージをお聴きできればと思います。

齋藤　こういう社会状況なので、就職や将来が気になるし、中間期を含めて、思い切った模索に向かわないのは無理もない。「とりあえずやらなければならないことをきちんとこなそうね」とフォローしつつ、でもせっかく大学という自由な場所、空間、いろいろな先生方がいるところだから、経験のつまみ食いでも何でもいいから、後から振り返った時に、意外といろいろなことをしてこれたなと感じられる学生時代を送ってほしいと思います。大学側としては、こんなこともあるよと適度なお節介をしながら、やりすぎない関わり方を求められていると思います。その一つとして、学生相談をうまく活用してほしい。話すことで、自分はたくさんの経験をしてきたんだな、本当にやりたいことはこれだなと吟味して、自分を豊かにしていってほしいと願います。

鈴木　たくさんの情報がある中で、有益な情報を得て有効に活用するといった器用な学生さんが多いように感じます。そういう近道もいいけれど、時間を費やし、ぶつかり自分の足で経験する、さらには本物に触れる経験もしてもらえたらと思います。

森田　もっと悩む時期はあってもいいなって思います。青春なんだし、さっき齋藤先生がおっしゃったように、いろいろなことをやってみると体験を通して考えることも出来ると思います。私も学生と一緒にいろいろ楽しめたらなって思います。

松本　ありがとうございました。最後にもうひとつ、名大は女子学生が増えていて、3分の1程度在籍しています。東工大も1割くらい在籍しているということですので、女子学生に向けてメッセージをお願いできますか？

齋藤　東工大では1割なので苦労が若干多いのは確かだと思います。4月初めの新入生の健康診断で、女子学生はみんな初対面のはずなのに、ものすごく賑やかで、即座にフレンドリーにつきあっている。そこは女性の良さかなと思います。その一方で、一度できた友達関係を壊すと、周りは男ばっかりだから居場所がなくなる、だから、友達関係を保ち続けなければいけないので、言いたいこともなかなか言えず、実は窮屈な思いをしているという相談を受けることがあります。また、研究室に所属すると、女性は自分だけという状況がしばしばおきるので、お茶汲みやお酌といった役割を周囲から期待されるといったことは未だにあるんです。僕たち男性が変わらなくてはいけないことで「先生や男子学生を一生懸命教育してるからね」って励ましながら、女子学生さんたちにはどう受け流すのがいいのか、時々は「それはおかしいと思いますよ」とさらりと言ってもらった方がいいのか、一緒に思案しています。とっても頑張っているので、応援したい気持ちでいっぱいです。女性がいると、男子学生も教職員も元気になります。

鈴木　今年度、初めて担当した基礎セミナーで、途中、同性グループをいくつか作って、異性からの質問を短歌で詠い返すという作業をしてもらったんですね。その後も男女別の課題をしばらく続けたところ、女性の情緒的成熟の速さや、物事に対する読みの深さが圧巻で、男子は完全に置き去りにされました。そういう力を大学生活の中でどんどん発揮していってほしいですね。

森田　私もちょっと似たようなことを言おうと思っていました。特に教育学部にいると圧倒的に女子学生が多いので、すでに主流で強い存在です。これからのキーパーソンズになるのではないかと思っています。

松本　女子学生に対する力強いメッセージをそれぞれ頂いたところで時間となりました。今日の対談はこれで終わらせていただきたいと思います。齋藤先生、遠いところからどうもありがとうございました。

発達心理精神科学教育研究センター　主催　公開講義

異文化間のメンタルヘルス

発達心理精神科学教育研究センターの主催で、4月9日（月）、アイルランド・ダブリンのトリニティ・カレッジ准教授であるスコカウスカス先生（Skokauskas, N.）をお招きし、公開講義「異文化間のメンタルヘルス」を開催しました。本学学生や学外の心理・教育関係者など約30名の参加がありました。

アイルランドにおける移民の現状

ダブリンでは、2002年から2006年にかけて人口が25％増加して6万人を超え、移民の占める割合も24％へ倍増しました。2006年にはEUの国々で3500万人の新しい住民登録がありましたが、移民が最も増大したのは、スペインとアイルランドです。移民のメンタルヘルス問題を考える際には、移住前の状態（経済や政治的迫害からの脱出、あるいは、経済的・職業上のステップアップ、先祖の出身国への帰還等といった移住の理由、移住前の心理的ストレスの有無）、移住のプロセス（強制か自発的か、計画的か無計画的か、合法か違法か、満足度や安全性、同行者の有無）、移住後の状態（子ども達のストレス）のそれぞれの要因を考慮する必要があります。

移民に伴う子どもの心の問題

子ども達は、移住前には、なぜ自分が国、友人、学校から離れなければならないかを理解できないし、移住後には、言葉や文化への適応、学校にまつわる問題等の多くのストレス源を抱えます。また、両親がいくつかの仕事をかけもちして、長時間働かざるを得なかったり、収入が増えたとしても移住先での生活費は不十分であったりと、経済的困窮の問題は無視できません。また，子ども達は親よりも早く、移住先の文化や言葉を習得するために、移民家族に付随する世代間の葛藤やストレスを生じることもあります。移民の子ども達は、異文化と引き裂かれた忠誠心との間で混乱しかねないのです。

異文化適応のプロセス

異文化への適応には、統合（新しい文化と出会いながら自らの文化のアイデンティティを維持する）、同化（オリジナルの文化を重視せず、メインの文化に対してポジティブな態度を示す）、分離（オリジナルの文化に対してポジティブな態度を示し、メインの文化に対してネガティブな態度を示す）の3種類があります。両方の文化を拒否する子ども達は、両方の文化に対して反抗するのです。

文化によってアイデンティティと個性が定義づけられるのです。そこで、私たちには、「文化への適性能力（cultural competence）」が求められます。この能力を獲得するためには下記の過程があります。まず、文化に対する知識から始まり、個人が態度を変えることができるという「気付き」に至り、違いは認めるけれども違いに価値を見出すまでには至っていない「文化的感性」を経て、最終的に二つの文化を行きつ戻りつしながら「文化への適性能力」を獲得します。その際に重要なことは、文化の熟考、異文化へのリスペクト、文化の違いをしっかりと評価すること、感受性と自己認識を示すこと、謙虚な気持ちです。

Message
スコカウスカス先生からのメッセージ

まず、名古屋大学にお招きいただき感謝申し上げます。日本の名門大学の一つであるこちらの大学に招待され、仕事をしたことは、私個人にとってはもちろん、ダブリンやアイルランドの私の大学や病院にとっても、大変名誉なことでした。

金子先生には、特に、震災後の相馬市や南相馬市への出張を企画していただき、とても感謝しています。当地で感じたことを、私は一生忘れることがないと思います。金子先生と相馬市について意見交換ができたこと、今後も日本のアイルランド大使と協力して支援をしていく考えを共有できたことを、とてもうれしく感じています。

残念なことがあるとすれば、あともう少しで名古屋大学を去らねばならないということです。しかしながら、これは私たちのコラボレーションの始まりであり、これからも一緒にプロジェクトを続けていくことを願っています。2013年にダブリンで開催されるEuropean Society for Child and Adolescent Psychiatryに、名古屋大学の仲間の皆様をお迎えすることを楽しみにしています。

活動報告

2012年度　研修会・講演など（センター主催・共催分）

公開講義

Skokauskas, Norbertas
（トリニティカレッジ（アイルランド）准教授・児童精神科医）

3月5日　18:00-19:00　E演習室
Introduction to Autism and Asperger's Syndrome

3月19日　18:00-19:00　E演習室
The psychological well being of survivors of institutional child abuse in Ireland

4月2日　18:00-19:00　E演習室
Why Lithuania has the highest suicide rate in the world: psychosocial–cultural perspective

4月9日　18:00-19:00　E演習室
Cross cultural child mental health: challenges ahead

Keskinen, Soili
（トゥルク大学（フィンランド）教育学部教授）

3月6日　19:00　F演習室
Finnish educational system

3月20日　14:00　F演習室
Teachers and teaching in Finland

3月26日　19:00　F演習室
Goals and principals in child and youth welfare care in Finland

来年度予定

発達障害児のライフサイクル支援セミナー
「発達障害児に対する将来を見据えた支援
～幼児期から成人期に向けて～」

日　時：平成25年8月23日（金）
場　所：名古屋大学　豊田講堂ホール　他
プログラム：
〈特別講演〉「特別支援教育の現状と課題」
樋口一宗　（文部科学省　特別支援教育調査官）

〈シンポジウム〉
「発達障害児へのライフステージに応じた支援～将来を見据えて～」
1. 「発達障害児への早期からの支援
～健やかな学校生活のために～」
野邑健二
（発達心理精神科学教育研究センター特任准教授）
2. 「二次障害に対する支援」
岩坂英巳
（奈良教育大学特別支援教育研究センター長・教授）
3. 「中学校現場で起こっていることとその対応」
井上朋子
（愛知県派遣中学校スクールカウンセラー・
一般社団法人サポートネットゆっか代表理事）
4. 「発達障害を持つ高校生・大学生への支援」
木谷秀勝
（山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授）
5. 「成人期を見据えた支援
～それまでに何を行うべきか？～」
髙橋　脩（豊田市こども発達センター長）

〈分科会〉
1. 幼児期の発達支援
岡田香織（発達心理精神科学教育研究センター研究員）
2. 特別支援教育における学校と専門家との協働
福元理英（発達心理精神科学教育研究センター特任助教）
3. 学習障害児のアセスメントと支援方法
畠垣智恵（静岡大学人文学部講師）
4. 学校における発達障害児の不適応の対応
小倉正義（鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師）
5. 発達障害児を持つ家族への支援
野邑健二
（発達心理精神科学教育研究センター特任准教授）

主　催：発達心理精神科学教育研究センター
後　援（予定）：
文部科学省、愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会、
三重県教育委員会、名古屋市教育委員会、
蟹江町、蟹江町教育委員会、
知多市、知多市教育委員会

2013年度 客員教授

Keskinen, Soili Rauni Hannele
University of Turku（フィンランド）
分野：発達心理学
研究テーマ：子どものメンタルヘルスと学校環境に関する研究
受入期間：平成25年3月2日～4月30日

2013年度 客員准教授

Wiguna, Tjhin
University of Indonesia（インドネシア）
分野：児童精神医学
研究テーマ：発達障害の比較文化的精神医学研究
受入期間：平成25年7月1日～8月31日

スタッフ紹介

■センター長・児童精神医学分野

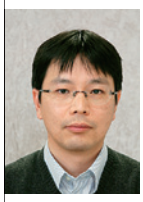
松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援に関する国際比較と心理教育プログラム開発
・子どもの心理アセスメント

■児童精神医学分野

本城秀次
教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・児童青年期の精神的問題
・乳幼児精神医学
・発達精神病理学

■母子関係援助分野

永田雅子
准教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子臨床
・発達障害の臨床
・乳幼児精神保健



金子一史
准教授･発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・近赤外線分光法を用いた母親と乳児の相互作用の検討
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■学校カウンセリング分野

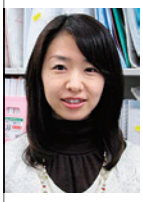
安田道子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・早期母子関係に問題を有する青年の心理療法
・発達障害児の母親への心理的支援

鈴木健一
准教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用

■発達障害分野における治療教育的支援事業

野邑健二
特任准教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス

福元理英
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討



岡田香織
特任研究員・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・子どもの発達、メンタルヘルス支援

森　裕子
特任研究員・発達心理学、臨床心理学
●研究テーマ：
・特別支援教育における心理士の専門性についての検討
・認知特性に配慮した学習支援方法や教材の開発
・学習支援の実践と情緒的効果についての検討

●編集後記

発達心理精神科学教育研究センターニュース第4号をお届けいたします。今回の特集では、大学生の心の健康について考えました。それを考える際に、座談会でも触れていますが、2012年3月に退職され、本学名誉教授となられた鶴田和美先生による「学生生活サイクル」の概念を基にしました。鶴田先生は当センター教授として、27年間にわたって名大生の心の健康に寄与されると共に、学生相談の分野における教育・研究に力を注がれました。特集に登場するメンバーは、鶴田先生と共に仕事をした元仲間でもあります。鶴田先生の概念をさらに発展させながら、現代の学生たちを支援していきたいと思っています。

鈴木　健一

KOKORO
名古屋大学発達心理精神科学
教育研究センターニュース
NO.4・2012年度